

(1) 実施機関名：

名古屋大学

(2) 研究課題（または観測項目）名：

（和文）史料の可視化から解明する南海トラフ巨大歴史地震像

（英文）Rupture processes of historical great earthquakes along the Nankai Trough elucidated from visualization of historical documents

(3) 関連の深い建議の項目：

1 地震・火山現象の解明のための研究

(1) 史料・考古・地形・地質データ等の収集と解析・統合

ア. 史料の収集・分析とデータベース化

(4) その他関連する建議の項目：

1 地震・火山現象の解明のための研究

(1) 史料・考古・地形・地質データ等の収集と解析・統合

イ. 考古データの収集・集成と分析

ウ. 地形・地質データの収集・集成と文理融合による解釈

(2) 低頻度かつ大規模な地震・火山噴火現象の解明

地震

(3) 地震発生過程の解明とモデル化

(5) 地震発生及び火山活動を支配する場の解明とモデル化

ア. プレート境界地震と海洋プレート内部の地震

2 地震・火山噴火の予測のための研究

(1) 地震発生の新たな長期予測（重点研究）

ア. プレート境界巨大地震の長期予測

4 地震・火山噴火に対する防災リテラシー向上のための研究

(1) 地震・火山噴火の災害事例による災害発生機構の解明

5 分野横断で取り組む地震・火山噴火に関する総合的研究

(1) 南海トラフ沿いの巨大地震

6 観測基盤と研究推進体制の整備

(3) 関連研究分野の連携強化

(5) 本課題の5か年の到達目標：

本計画では前計画で有効性が確認されたGISを用いた史料の見える化を南海トラフ全域に広げていく。具体的には三重県、愛知県、静岡県、和歌山県、高知県、大分県、宮崎県などについてもできる限り地方史などを中心に入力を行う。史料だけでなく津波堆積物の情報など南海トラフ地震を考える上で必要な情報についても追加していく。その上で可視化された史料からこれまでに南海トラフで発生したそれぞれの巨大地震の相違点を明確化し、南海トラフ巨大歴史地震の地震像解明を目指す。

また、各地にはまだ翻刻されていない史料もたくさんあることから南海トラフ巨大地震に関する古文書調査、翻刻も並行して行う。またどの史料にどの地震の情報があるのか、すでに出版された史料集を元に検索ができるシステムを前計画で構築したが、その後収集された史料についても追加し検索できるようDBの更新も行う。

兵庫県立大学を中心とした史料調査チームでは、歴史地震に関する史料の収集と解読のための人材育成を通じて、住民が主体的に地域の地震災害の履歴を学び防災意識を高めることのできる方途を検討・

実行することで効果的な防災意識啓発の手法を明らかにする。

(6) 本課題の5か年計画の概要：

令和6年度：三重県、愛知県、静岡県、和歌山県を中心に地方史・郷土史等の史料収集を行うとともにそれらの情報についてGISに入力を行う。地震毎の比較が行える地域についてはその比較を行い、南海トラフで発生したそれぞれの巨大地震の相違点を明確化する。史料調査チームでは有志の参加を募って1854年安政東海・南海地震の記録である「大沢家本願寺関係文書」の解説と未発見史料の探索を行う。

令和7年度：三重県、愛知県、静岡県、和歌山県に加え、新たに高知県の情報についても地方史・郷土史等の史料収集を行うとともにそれらの情報についてGISに入力を行う。地震毎の比較が行える地域についてはその比較を行い、南海トラフで発生したそれぞれの巨大地震の相違点を明確化する。史料調査チームでは令和6年度に引き続き、「大沢家本願寺関係文書」の解説と未発見史料の探索を行うとともに、調査した情報の要約方法について検討を行う。

令和8年度：三重県、愛知県、静岡県、和歌山県、高知県に加え、新たに宮崎県の情報についても地方史・郷土史等の史料収集を行うとともにそれらの情報についてGISに入力を行う。地震毎の比較が行える地域についてはその比較を行い、南海トラフで発生したそれぞれの巨大地震の相違点を明確化する。史料調査チームでは「大沢家本願寺関係文書」の調査結果を取りまとめるとともに、歴史地震資料調査を通じた防災教材の作成について検討を開始する。

令和9年度：三重県、愛知県、静岡県、和歌山県、高知県、宮崎県に加え、新たに大分県の情報についても地方史・郷土史等の史料収集を行うとともにそれらの情報についてGISに入力を行う。地震毎の比較が行える地域についてはその比較を行い、南海トラフで発生したそれぞれの巨大地震の相違点を明確化する。史料調査チームでは歴史地震資料調査を通じた防災教材を作成し、各種防災イベント等においてワークショップを実施することで効果を測定する。

令和10年度：三重県、愛知県、静岡県、和歌山県、高知県、宮崎県、大分県に加え、新たに愛媛県、徳島県の情報についても地方史・郷土史等の史料収集を行うとともにそれらの情報についてGISに入力を行う。地震毎の比較が行える地域についてはその比較を行い、南海トラフで発生したそれぞれの巨大地震の相違点を明確化する。最終年度はこれまでに得られた情報から南海トラフ巨大歴史地震の地震像を考える。史料調査チームでは令和9年度までに作成した防災教材を展開し、地域住民が主体的に地域の歴史地震の調査に参加できる住民参加型の教材を設計する。

(7) 令和7年度の成果の概要：

・今年度の成果の概要

当初の計画どおり、三重県、愛知県、静岡県、和歌山県、高知県の地方史・郷土史等の史料収集を行うとともにそれらの情報についてGISに入力を行った。昨年度南海地震で紀伊半島南部では揺れが小さいにもかかわらず大きな津波が比較的早くにやってきて津波による大きな被害が出ている事を指摘した。今年度はその原因を収集史料および最近の観測研究成果と合わせて検討した。昭和南海地震のすべり分布と海底地殻変動データから推定された固着状態とを比較すると、紀伊半島に近いアスペリティは固着が弱い場所にあたり、両側に固着の強いところが存在する。そのことから固着が強いところがすべったことにより固着が弱い場所も道連れにゆっくり滑ったのではないかと考えると紀伊半島南部の被害について説明ができそうである。

史料調査チームにおいては、兵庫県立大学・名古屋大学・他のメンバー共同による「減災古文書研究会」の活動を通して令和7年度の研究活動を実施した。主な活動内容は、史料解説・史料収集・防災教育の実践・広報である。

史料解説については、令和6年度以前から実施している『大沢家本願寺関係文書』（安政東海・南海地震に関する西本願寺関係者の記録）と『遼変記』（1790-1855年の地震、火山噴火、気象災害、異常現象、事件の記録の集成。福岡藩士の編纂物）の解説を継続した。また、『鳥羽御城石垣惣躰高サ式尺築足一件他』（令和5年度に解説した鳥羽御城石垣御修復一件（安政東海地震・津波による鳥羽城の被害と石垣修復に関する記録）の続報）の解説を終え、新たに『嘉永六癸丑年相州小田原之城下二月二日・三日兩度之大地震ニ而潰家破損等書立之写』および『信州浅間嶽大異変御代官注進状』の解説を開始した。

史料調査については、研究会メンバーによる査読付き論文「戦時下の新聞は昭和東南海地震をいか

に伝えたか」を歴史地震研究会の論文誌『歴史地震』へ投稿し、掲載された。

防災教育の実践については、防災関係行事における出展・ワークショップ5件（技科大・高専カンファレンス in 豊橋（愛知県豊橋市）・名古屋大学減災連携研究センター夏休みスペシャル減災教室（名古屋市）・ぼうさいこくたい2025（新潟市）・あまおだ減災の日（兵庫県尼崎市）・JMoF 2026（愛知県豊橋市））においてかわら版『諸国大地震大津波末代噺』を利用したすごろくゲームを実施した。その際、ワークショップ実施の前後で質問紙調査を行うことにより学習効果を測定し、統合指標「災害に対する興味関心と知識」が向上したことが明らかになった。

広報活動については、総務省近畿総合通信局の関西官学連携推進ポータルにおいて活動が紹介されたほか、第22回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム（神戸市中央区）と歴史フェス2025（京都市）にてブース展示を行い、研究成果の社会還元を推進した。

・「関連の深い建議の項目」の目的達成への貢献の状況と、「災害の軽減に貢献する」という目標に対する当該研究成果の位置づけと今後の展望

本研究では史料を読み解くことから、安政、昭和の南海地震の紀伊半島南部での特徴（揺れが小さいが、比較的すぐに規模の大きな津波がやってくる）を見つけた。このことはこれまで明確には指摘されていない。この現象の解明は南海トラフ地震の発生機構の解明やモデル化に大きく貢献する。またこの現象が過去の地震でも同様であれば、紀伊半島南部の南海トラフ地震の災害対応は大きく変わってくることになる、災害軽減に大いに貢献できると考える。

また歴史地震に関する新たな史料の収集と解説は歴史地震の新たな情報源になると共に、今後の人材育成にもなっている。さらにこれまでに作成したかわら版『諸国大地震大津波末代噺』を利用したすごろくゲームを様々な場で活用することで、参加者の防災意識の向上にも役立っている。

(8) 令和7年度の成果に関連の深いもので、令和7年度に公表された主な成果物（論文・報告書等）：

・論文・報告書等

柳井七海, 福島栄寿, 北村昌卓, 平井敬, 2025, 戦時下の新聞は昭和東南海地震をいかに伝えたか, 歴史地震, Vol. 40, pp. 65-79., 査読有, 謝辞有

内村優太, 北村昌卓, 平井敬, 2026, 1944年12月10日の滋賀県北部の地震(M5.3)における観測震度の再評価, 減災復興学研究, Vol. 3, 査読無, 謝辞有

三村暉, 弘田尚也, 北村昌卓, 平井敬, 2026, かわら版史料による防災教育の実践と効果 ―歴史に触れる防災教育―, 中部「歴史地震」研究年報, Vol. 14., 査読無, 謝辞無

居樹幸太郎, 2026, 減災古文書研究会の活動紹介, 中部「歴史地震」研究年報, Vol. 14., 査読無, 謝辞無

・学会・シンポジウム等での発表

山中佳子, 2025, 南海地震は何か変?, 日本地球惑星科学連合2025年大会, SSS11-P26

山中佳子, 2025, 南海地震の震度から推測される破壊過程, 第42回歴史地震研究会, O-23

山中佳子, 2025, なぜ南海地震時、紀伊半島南部で揺れの被害が少なかったのか?, 日本地震学会2025年度秋季大会, S08-31

山中佳子, 2025, なぜ南海地震時、紀伊半島南部で揺れの被害が少なかったのか?, 日本地震学会2025年度秋季大会, S08-31.

内村優太, 北村昌卓, 平井敬, 2025, 1944年12月10日の滋賀県北部の地震(M5.3)における観測震度の妥当性に関する研究, 第56回地域安全学会研究発表会（春季）

内村優太, 北村昌卓, 平井敬, 2025, 1944年12月10日の滋賀県北部の地震(M5.3)における観測震度の妥当性に関する研究, 第26回中部「歴史地震」研究懇談会.

弘田尚也, 2025, 南海地震アーカイブ, 第26回中部「歴史地震」研究懇談会.

三村暉, 弘田尚也, 北村昌卓, 平井敬, 2025, かわら版史料による防災教育の実践と効果 ―歴史に触れ

る防災教育一、第26回中部「歴史地震」研究懇談会。

居樹幸太郎, 2025, 減災古文書研究会の活動紹介, 第26回中部「歴史地震」研究懇談会。

三村暉, 弘田尚也, 北村昌卓, 平井敬, 2025, かわら版史料「諸国大地震大津波末代噺」を用いた防災教育の実践, 第42回歴史地震研究会（豊岡大会）, O-04.

(9) 令和7年度に実施した調査・観測や開発したソフトウェア等のメタ情報：

(10) 令和8年度実施計画の概要：

令和7年度に引き続き、三重県、愛知県、静岡県、和歌山県、高知県に加え、新たに徳島県、岐阜県の情報についても地方史・郷土史等の史料収集を行うとともにそれらの情報についてGISに入力を行う。地震毎の比較が行える地域についてはその比較を行い、南海トラフで発生したそれぞれの巨大地震の相違点を明確化する。また南海地震の震源過程についても検討する。

史料調査チームでは、令和7年度に引き続き、『大沢家本願寺関係文書』・『違変記』・『信州浅間嶽大異変御代官注進状』の解読と未発見史料の探索を行う。その調査結果を取りまとめるとともに、歴史地震資料調査を通した防災教材の作成について検討を開始する。

(11) 実施機関の参加者氏名または部署等名：

鷺谷威（東海国立大学機構名古屋大学大学院環境学研究科）、山中佳子（東海国立大学機構名古屋大学減災連携研究センター）、都築充雄（東海国立大学機構名古屋大学減災連携研究センター）、石川寛（東海国立大学機構名古屋大学大学院人文学研究科）、幸山寛和（東海国立大学機構名古屋大学減災連携研究センター）、武村雅之（東海国立大学機構名古屋大学減災連携研究センター）

他機関との共同研究の有無：有

平井敬（兵庫県立大学 大学院減災復興政策研究科）

(12) 公開時にホームページに掲載する問い合わせ先

部署名等：東海国立大学機構名古屋大学大学院環境学研究科地震火山研究センター

電話：052-789-3046

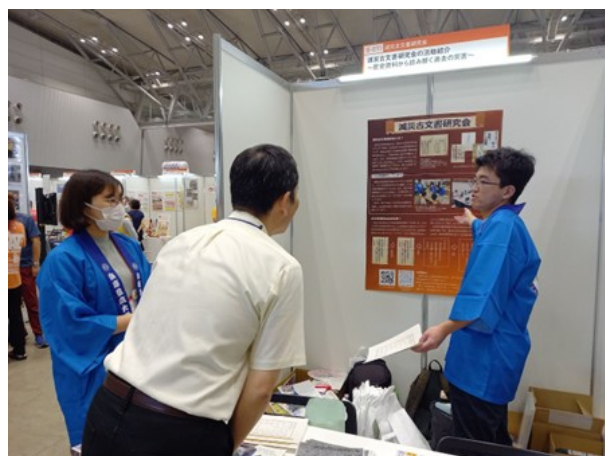
e-mail：

URL：

(13) この研究課題（または観測項目）の連絡担当者

氏名：鷺谷威

所属：東海国立大学機構名古屋大学大学院環境学研究科



ブース展示による活動紹介（ぼうさいこくたい2025）



かわら版資料を活用した歴史災害に関するワークショップ（あまおだ減災の日）